

課題2 「主体性等」をどう育てるか？

# 入学前教育見直し 5つの視点



## 1 入学後の学びに向かう意欲を育んでいるか

単調なドリルをこなすだけの課題では、意欲が上がらないどころか、大学での学びへの期待が下がることもある。高校と大学のつながりを実感させ、期待を持って入学できるようなプログラムにしたい。

## 2 学生に結果をフィードバックし振り返りをさせているか

「解いて終わり」「提出して終わり」では、学生は自身の力を把握することが難しい。大学側から結果をフィードバックすることで取り組みの成果を実感させ、できているところ、できていないところを自覚させることが大切だ。

## 3 カリキュラムポリシーに沿ったプログラムになっているか

自学の学生を育てる第一歩が入学前教育であると考えれば、育成したい人材像や、入学後の教育方針や内容と連動したものであるべき。カリキュラムポリシーを踏まえて、プログラムの内容を検討しよう。

## 4 組織全体で目的意識の統一がなされているか

「何を課しているのか担当教員しか知らない」状態では、入学後の教育に生かせない。入学者に携わる主な教職員が、プログラムの目的、内容、結果を共有し、役割に応じてそれらを活用できる体制が、教育に一体感をもたらす。

## 5 入学者のデータを収集し入学後の指導に生かしているか

入学前教育は、入学者の学習習慣や姿勢、学力、汎用的スキルなどを知る機会でもある。課題の提出状況、成績、アンケートの回答などから個々の入学者の傾向を読み取っておけば、入学後必要に応じて適切な教育や支援を開始できる。

解決のヒント①

# 「主体性等」を育む 入学前教育とは

入学前教育については今後、「主体性等」の育成を高大でつなく役割が期待されている。現状の課題と見直しのポイントと、効果をあげ始めている大学の実践例を紹介する。

## 学びへの意欲を高め、入学後の教育につなげているか？ 入試改革は入学前教育のあり方を見直すチャンス

### 入学前教育を課す意図が 入学者に伝わっているか

学びへの意欲は、主体的に学びに向かう姿勢の土台となるものです。入学前教育は入学者に接し、その学びへの意欲を高めてもらうよい機会ではありますが、現実には半数の大学が、入学者の「意欲喚起」が課題だと感じているようです（下表）。

現状、主流となっている入学前教育は、高校の教科学習を補填するリメディアル教育と、課題図書を読んだレポートです。しかし、当社の学生調査によると、課題の意図が彼らに伝わっていないケースが多数あります。ただ「やりなさい」だけではなく、その学びが大学でどう生きるのか、学びへの動機付けが必要だと言えそうです。

### 高校が育てた「主体性等」を 大学の学びに接続する

また、提出されたレポート等についてフィードバックによる振り返りの機会を設けないと、入学者の大学に対する期待度は高まらないという意見もあります。そのことに気づいていながらも、教員の負荷が大きいため、手が回らないとの声も多く耳にします。

高校の先生からは、探究学習やアクティブ・ラーニングの導入が進む一方で、それらが大学の学問にどうつながっているのかを生徒に意識させるのは難しいという話を聞きます。培ってきた「主体性等」が大学でどう生かせるのか、入学前教育を通じてその一端を提示できれば、高大接続の取り組みとして大きな意味があるのではな

いでしょうか。

入学後の学生支援の観点からも、入学前教育は有効です。入学前教育の実施結果を活用することで、個別のデータに基づいたきめ細かな教育の提供が可能になります。入学前教育を「導入教育」として位置付け、新入生一人ひとりにより多面的に把握し、指導する体制を確立している大学もあります。プログラム内容もカリキュラムポリシーにのっとったものが望ましいでしょう。

入学前教育を始めて10年以上たつ大学も多くあります。入学までの空白期間を埋める「とりあえず」の措置ではなく、入学者の主体性を育む第一歩とし、取り組みを見直す大学も出てきました。P.24ではその具体的な事例をご紹介します。

## 意欲を喚起させたくても、実態は高校の学習の延長

### 入学前教育実施の目的 (H28年度入試)

学習習慣維持	80%
高校の復習	67%
大学の学習	64%
大学帰属意識形成	44%

### 入学前教育をより充実したものに するための最も重要だと考える課題 (H28年度入試)

意欲喚起の施策作成	50%
学力アッププログラム作成	29%
入学前教育のための組織・体制作り	10%
入学前教育に対する教員の意欲	4%
出身高校との連携	3%
経費の確保	3%

\*文部科学省大学入試室調べ






(株)進研アド 改革支援室  
石田あすみこ

取材・文/見山雄介 撮影/亀井宏昭

課題2 「主体性等」をどう育てるか?

主体的に学ぶ意欲を喚起する 入学前教育見直し事例

入学前教育を見直し、主体的に学ぶ意欲の向上に取り組む3大学を紹介する。

	課題	見直しの観点	対象者	BEFORE	AFTER	成果	将来構想
<p><b>北海道文教大学</b> 人間科学部 健康栄養学科</p>  <p>▶ 恵庭キャンパス ▶ 学生数 / 593人 ※健康栄養学科のみのデータ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 入学者間の学力差が大きく、学力下位層は入学後の学習意欲が低くなりがち。効果的な対策を打てていない</li> <li>● 課題を一方的に出すのみで、意義の説明や添削などのフォローができていない</li> <li>● 担当教員以外に課題の内容、結果が共有されていない</li> <li>● 入学前教育にどのような効果があるのか検証できていない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 内容理解や復習などに、学生が主体的に取り組めるようにする</li> <li>● 学力下位層の基礎学力を底上げする</li> <li>● 入学者の学力、学習スキル、意欲等の把握</li> <li>● データを教員間で共有し、入学後の教育に活用する</li> </ul>	対象者	推薦・AO入試による入学者(全員)	一般入試を含む全入学者	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ただ課題を解くだけでなく、テキストによる「内容理解」、添削結果を参照した「復習」が可能に</li> <li>● 入学前に学力が把握できるようになったため、入学後に行っていた基礎学力テストが不要になった</li> <li>● データを指導に生かせる点に大学が理解を示し、学科予算ではなく大学予算がつくことに</li> <li>● 教員がデータの重要性を再認識し、IRの充実につながった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 入学前教育の受講結果から指導を強化すべき学生を見つけ、上級生が指導するしくみを構築する</li> <li>● 受講結果から国家試験の成否に至るまで、追跡調査を実施。データを活用した教育改善を進める</li> </ul>
<p><b>帝京平成大学</b></p>  <p>▶ 5学部19学科 ▶ 池袋、中野、千葉、ちはら台各キャンパス ▶ 学生数 / 10298人</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 受講率が低下</li> <li>● 入試対策の延長線上にある内容で、入学後の学びとの関連が薄い</li> <li>● 入学前教育の意義を受講生に説明できていない</li> <li>● 前年度の内容を踏襲するルーチンワークとなっており、PDCAサイクルを回す意識が不足がち</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 教材受講率の向上</li> <li>● 受講者のレベル、入学後の学びに合った教材を提供し、大学生活に対するモチベーションを高める</li> <li>● 受講の意義を入学者に伝える</li> <li>● ワーキンググループが複数業者の教材を調査して各学科に情報を提供、教育改善に役立つ教材を選択させる</li> </ul>	対象者	・AO特別入試による入学者(全員) ・他のAO入試と推薦入試による入学者(受講希望者)	2018年度からは一般入試入学者へも拡大	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 受講率が約20%上昇(見直し前と比較した2016年度の受講率)</li> <li>● 受講者の提出状況、学習スキル、意欲など詳細なデータが取得できるようになる</li> <li>● 各学科の入学前教育に対する意識が高まり、添削課題に加えて独自の学習資料等を提供するようになった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 入学前教育の受講結果と、入学後のアンケート調査を照らし合わせて成果を検証、より効果的な実施対象・方法を検討する</li> </ul>
<p><b>近畿大学</b> 産業理工学部</p>  <p>▶ 福岡キャンパス ▶ 学生数 / 1653人 ※産業理工学部のみのデータ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 推薦・AO入試入学者の、学びに対する主体性が弱い</li> <li>● スクーリングは一方向的な講義なので、主体性を育むための働きかけが弱い</li> <li>● 添削課題の提出率が低い</li> <li>● 作問や添削は教員の負担が大きい</li> <li>● 添削課題の内容は学科ごとに異なるため、結果データを比較できない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 基礎学力だけでなく、大学の学びに対するモチベーションを高める</li> <li>● 添削課題の提出率の向上</li> <li>● 教員負担の軽減</li> <li>● 個別指導に生かせるさまざまなデータの取得</li> </ul>	対象者	推薦・AO入試入学者(全員)	同じ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● スクーリング時、参加者(入学者、在校生)の姿勢が前向きに</li> <li>● 添削課題の取り組み姿勢や成績が学科間で比較可能に</li> <li>● 添削課題の提出率の向上</li> <li>● 教員負担の軽減</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 入学前教育の受講結果から成績データ、学生生活情報まで各データを連結し、連続した個別指導を具体化していく</li> </ul>

入学後にどんなことを学ぶのか、入学前教育はその学びにどのような役割があるのか、入学をどれだけ待ちわびているのかなどが、オリジナルメッセージで語られています。受講が必須である一部の入試方式の合格者のほかは、希望者のみが受講する形式ですが、2014年にこの取り組みを開始してから受講率が上昇し、現在も改善を重ねています。

**在学生がロールモデル 入学後をイメージさせる**

近畿大学産業理工学部は、以前から採り入れていたスクーリングを、受動的な講義形式から、参加型のグループワークに変えました。在学生がファシリテーターを務めることにより、協働的な学び方や将来像を伝え、知的好奇心を喚起しています。

スクーリングだけの取り組みだと、その時は合格者の意欲が高まっても、効果が長続きしにくい傾向があります。そのため同学部では、添削課題とそのフィードバックを通じて、入学後の学びへのモチベーションを喚起。さらに、入学後に個人面談を実施してフォローに連続性を持たせ、高い意欲を保ったまま初年度の学びへと向かわせています。

**個々の入学者を知り 入学後の教育に生かす**

北海道文教大学人間科学部健康栄養学科は、入学者に添削課題やアンケートを課し、その結果をデータとして取得。入学後の教育に生かす取り組みをしています。データを学科の教員間で共有し、学力や意欲から、指導を強化すべき学生を特定、学科の教員が協力して指導にあたっています。入学後、早期に手を打ち、退学者や国家試験不合格者を減らそうという狙いです。

今後は、出席率、成績等の入学後の状況や、国家試験の可否などのデータと連結させることにより、主体的に学ぶ学生の傾向を把握して教育改善に役立てようと計画しています。

**受講率を向上させた トップ発のメッセージ**

高校教員への調査結果を見ると、8割以上が「入学前教育をもっと充実させてほしい」と大学に望んでいます。この希望に応える形になっているのが、帝京平成大学が入学者に送付している、入学前教育の受講を促すメッセージです。書き手は学長や学科長。数行の定型文で済ませる大学が多い中、

※ベネッセ教育総合研究所「高大接続に関する調査」2013年